



TITLE:

# ヒトハリザトウムシの瀬戸臨海実験所北浜への規則的な出現

AUTHOR(S):

久保田, 信

---

CITATION:

久保田, 信. ヒトハリザトウムシの瀬戸臨海実験所北浜への規則的な出現. くろしお 2007, 26: 19-20

ISSUE DATE:

2007

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/188213>

RIGHT:

© 南紀生物同好会

## ヒトハリザトウムシの瀬戸臨海実験所北浜への規則的な出現

久保田 信

西日本では生息が海岸に限定されているが東北以北では内陸の公園などに出現するヒトハリザトウムシ *Psathyropus tenuipes* はB染色体を多数有し、その数に地理変異があり進化研究の好適な材料となっている (Tsurusaki, 1993; Gorlov & Tsurusaki, 2000a, c; 鶴崎・湊, 2000)。本種は若い個体の時から脛節と蹠節の末端部分が白色を呈し、成体では背部に1本短い棘があるので現場での同定は困難ではない。今回、和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所北浜の満潮線付近での本種の出現に規則的なパターンがあることを中心に、クモの一種に捕食された例やハマトビムシの一種を摂食した例を目撃したので報告する。

## (1) 昼間の遭遇

下記のように、過去3年間に毎年夏季に出現した。2005年と2006年は6月中旬がくると満潮線付近に数個体が出現しているのが確認された。いずれも大きさから判断して若い個体であった。2007年は、過去2年間よりも1ヶ月早い5月中旬に出現を確認した。

- ・2005年6月13日 2個体
- ・2006年6月14日 夕方  
干潮時の満潮線付近に3個体
- ・2006年6月17日午前9時 朝 (小雨)  
満潮時の満潮線付近に1個体
- ・2007年には、5月16日の16:30頃 (曇天) に初めて3個体出現

## (2) 夕方から深夜、そして昼間の経時的観察

2006年9月20日 (曇天) の日の入り直後の午後18時頃から北浜の岩場の1箇所本種100個体ほど東から西へと行進し、多数個体が岩から砂浜に降り、満潮線付近まで進んだ。このような出現が少なくとも3日間繰り返して確認でき

た。岩場での行進は肉眼で姿が見えなくなるまでの30分ほどしか見られなかったので、9月22日には、懐中電灯をもって暗くなってからの行動も観察した。すると、19時頃にはその岩場のあちこちのくぼみで多数の個体が散らばってみな静止していた。

翌朝8時過ぎ、2個体が岩場にはられたクモの一種の巣にかかり死亡していた。クモの別の巣では1個体の死亡を確認した。この時、北浜にあるどの地点の岩場にもいっさい本種の姿はなく、どこかへ移動した後であった。その後、11時の観察でも姿は消えたままだった。

9月25日の18時に多数がいっせいに出現し、30分以内に岩場のあちこちのくぼみに落ち着いた。岩場や砂浜を歩行している個体に強力なライトをあてると素早く逃げさる個体が多かった。また静止している個体にライトをあてると移動した。

26日も18時に多数が出現開始。砂浜へ岩場からおり、波うち際まで歩行する個体もいた。2個体が植物質のきれっぱし、あるいは発砲スチロールをくわえて運んだり、2本のパルプを動かしつつ、その素材を執着して離さなかった。前夜からの2夜連続だったが、時間を見るのに地面においた携帯のストラップの布に2個体、6個体がそれぞれ集合し、パルプでつつきまわした後に不動となった。光を相当近くであててもびくともしないし、ふっておとそうとしても離れずしがみついている個体もいた。また落ちてもまた地面においたすぐにストラップにもどってきた。

27日は、15時、15時半、16時の3回昼間に定点での出現はなかったが、18時頃に暗くなると出現を開始した。この日は定点にはどこから現れるか注目していたが、オーバーハングした岩

の地上から数m上の狭い割れ目に目をつけていたがそこからではなく、傾斜した砂浜の上に落石して積み重なった2箇所の岩組の隙間から出てくると推察した。

9月29日、10月2日と4日18時頃に、多数が上記と同様の時刻に同様の状態で同じ岩場に出現。2日には2個体がハマトビムシの一種を捕獲した後にかじって食べた。気温はこの頃24℃程度。

2006年10月20日18時頃、前述の個体よりも数が減少したものの数十個体のヒトハリザトウムシが出現した。気温は23.3℃。

2006年11月5日17時15分からの観察ではわずかに13個体の出現だった。気温は20.5℃と降下した。

以上の観察期間中、ヒトハリザトウムシは摂餌も吸水も交尾を一度もしなかった。夕方の大量出現は、昼間に密集している個体群が、日暮れとともに暗黒になる前にばらばらに分散する行動であろう。直射日光もあたらず、涼しさで個体間の距離を長く保てる夜をすごすのだろう。やがて冬季に入ると出現は見られなくなった。

## 謝辞

本種の同定をして下さり、貴重なご教示を下された鳥取大学地域学部地域環境学科生物学研究室の鶴崎展巨博士に深謝致します。

## 引用文献

- Gorlov, I. P. & Tsurusaki, N. 2000a: Analysis of the phenotypic effects of B chromosomes in a natural population of *Metagagrella tenuipes* (Arachnida: Opiliones). *Heredity*, 84, 209-217.
- & ————— 2000c: Morphology and meiotic/mitotic behavior of B chromosomes in a Japanese harvestman, *Metagagrella tenuipes* (Arachnida: Opiliones): No evidence for B accumulation mechanisms. *Zoological Science*, 17, 349-355.
- Tsurusaki, N. 1993: Geographic variation of the number of B-chromosomes in *Metagagrella tenuipes* (Opiliones, Phalangida, Gagrellinae). *Memoirs of the Queensland Museum*, 33, 659-665.
- & Shimada, T. 2004: Geographic and seasonal variations of the number of B chromosomes and external morphology in *Psathyropus tenuipes* (Arachnida: Opiliones). *Cytogenetic and Genome Research*, 106: 365-375.
- 鶴崎展巨・湊 宏. 2000: 和歌山県のザトウムシ類. *南紀生物*, 42(1), 3-8.
- (〒 649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町459  
京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所)